

2025年度第1回渥美半島野生イノシシ捕獲根絶協議会 会議録

1 日時

2025年7月24日（木） 午後1時30分から午後3時30分まで

2 場所

愛知県東三河総合庁舎 2階 大会議室

3 出席者

渥美半島野生イノシシ捕獲根絶協議会 構成員

4 会議内容

(1) 開会

(2) あいさつ（農業水産局農政部農業振興課 野生イノシシ対策室 住田室長）

- ・本協議会は、渥美半島の野生イノシシによる豚熱ウイルスの拡散防止や、農業被害を防止するため、渥美半島地域における、野生イノシシの根絶を目指すことを目的に設置しており、今年で7年目である。
- ・県内の野生イノシシの豚熱の感染状況について、今年度に入ってから、陽性個体は確認されていないが、年度を明ける前の3月24日に豊田市、岡崎市内それぞれ1個体ずつ陽性が確認されており、引き続き油断できない状況である。
- ・改めて、防疫対策の徹底を呼びかけていただきたい。
- ・本日の協議会では東京女子大学名誉教授の石井先生により、「根絶を達成した奄美マングース防除事業」についての御講演をいただく。
- ・また、愛知みなみ農業協同組合養豚部会長にも御出席いただく予定である。
- ・イノシシ捕獲に係る取り組み状況や、今年度の予定などについても説明をさせていただきます。
- ・御出席の皆様方に率直な意見をお出しいただき、それらについて今後の協議会の取り組みに生かしていければと考えている。

(3) 講演 根絶を達成した奄美マングース防除事業について

（講師：東京女子大学名誉教授 石井 信夫）

【概要】

- ・マングースが奄美大島に持ち込まれたのは1979年頃。公式な記録はなく曖昧なところがあるが、1979年に30頭程度、ハブ対策ということで持ち込まれた。
- ・ハブは夜行性、マングースは昼行性で、なかなか出会うこともなく、積極的に襲うこともなかったためマングースはハブの減少には役立たなかった。
- ・マングースによる農作物や養鶏の被害がでてきたため、1993年から報奨金制による有害駆除が始まった。その後、1996年から5年間の予定で環境庁による調

査が始まった。

- 1999年頃の状況ではマングースの生息分布が島の4割くらいになっていた。
- 個体数は5,000頭から10,000頭、もし何もしなかったら1年間で約1.4倍になると推定された。
- 調査事業は1年前倒しで終了し、2000年度から環境庁が報奨金制の生捕罟を用いた捕獲による移入種駆除事業を開始したが、その後3年目（2002年度）に給与制で捕獲従事者の雇用を始めた。
- 罟は捕殺式筒罟と生捕式カゴ罟の2つのタイプが使われていた。雇用従事者だけに使用を認めた捕殺式筒罟は毎日の見回りを必要とせず、捕獲努力量の増大に効果を上げた。
- 2004年に外来生物法が制定され、2005年度に10年の防除計画が策定された。また、このときにマングースバスターズという給与制による捕獲チームが結成された。1頭いくらの報奨金制は2003年度に終了した。捕獲チームの結成と捕殺式筒罟の使用により捕獲努力量が圧倒的に増えた。
- 2000年から事業が始まって、多いときには150人以上の人たちが報奨金制による捕獲に参加していたが、マングースの密度が下がって捕れなくなってきたため雇用制による捕獲に変わった。雇用制になってからは40人、多いときは50人が捕獲に従事した。
- 個体数が低減し低密度化が進んできた2007年度に探索犬の育成が開始された。
- マングースは合計で32,700頭くらい捕獲された。2000年度には1年間に4,000頭くらい捕れていたが、有害駆除による捕獲はだんだん減っていった。2004年度からは防除事業による捕獲のみとなった。
- 2009年度以降、捕獲努力量（罟ごとの設置日数の合計）は少ない年でも200万くらい投入され、最後のマングースが捕れた2018年度でも250万くらいの努力量をかけ続けていた。最後の捕獲があった2018年度以降も、残っているかもしれないということで6年近くずっと罟をかけ続けていた。
- マングースの行動範囲は5ヘクタール（円と仮定すると半径約126m）くらいなので、罟ラインは約100m間隔で尾根沿いに罟を50メートルおきに設置していた。2013年度ぐらいから捕獲できる範囲が縮小していった。2016年度だと2箇所程になった。
- 第一期防除実施計画では2013年度までの根絶を目標としていたが、目標達成は無理だということが明らかになり、2013年から2022年度の10年の第2期計画を作った。
- 2018年度以降は捕まっていないが、絶滅したことは証明できないので、絶滅したかどうかの確率を推定した。マングースが残っていたとして、ずっと捕まらない確率はどれくらいかを計算して、2023年度末に根絶確率が約99%という推定に基づいて根絶宣言をした。
- これだけ大きな島からマングースを根絶した事例は世界的にみてもなかったので、慎重に判断したため、最後の捕獲から根絶宣言まで6年間かかった。

- ・2006年以降、年に1億5千万～2億の予算がついていたが、マングースバスターズの人たちが40人くらいいたので、2億といっても一人当たりだと年500万くらいの費用であり、非常に少ない予算でやっていた。
- ・目標を明確化し、捕獲の地点や年月日などを記録し、CPUE（単位捕獲努力量当たりの捕獲数）を計算して、いま計画のどういう段階にあるかを確認しながら進めていった。
- ・事業を運営する体制については命令系統がはっきりしていて、みんな絶対に根絶するんだという使命感を持って取り組んでいた。
- ・捕獲数が少なくなっても捕獲努力量はどんどん上げて行った。通常の駆除事業とは逆の状態。普通は被害が減ってくると予算も減るが、それは絶対にしなかった。それを続けることで根絶することができた。

【質疑・意見等】

(事務局) 事業の最初から根絶を目標として意識していたか。

(講師) 根絶は理想ではあったがどうやってそれを達成できるかがはっきりしていなかった。

(事務局) 環境省としてもそういう認識だったのか。

(講師) 数を減らすのは比較的簡単だが、残ったものを0にするのが難しい。どこにどのくらい罠をかけたかの記録を取って、PDCAサイクルをまわしていくことで奄美のマングースの場合はうまくいった。沖縄のやんばるでも同じような事業をやっているが、もう少しかかると思う。

(豊橋市農業支援課) 沖縄のやんばるについて、沖縄本島だと広いがやんばるといった限定的な地域であれば根絶は可能なのか。それとも奄美だからこそ成功したのか。地形的なものなのか。

(講師) 広さというより、根絶するための条件があって、新しい個体が入ってこないことが重要。奄美に関しては島だからシンプルにできた。沖縄島は中南部にマングースが多くいるため、やんばる地域は南の方から入ってくる危険性が常にある。やんばると中南部の間に柵があり、その効果によって柵の南北で10分の1くらい密度が違う。まだ0にはできていないが、0に近い状態をキープすることを目標にしている。

(豊橋市環境保全課) マングースの生息分布について、当初ある程度全域で調査を進めていたのか、過去の調査実績から進められたのか。

(講師) 1996～99年までの調査事業は全域で調査している。過去の状況については、集落にいつからマングースがいるかを聞いてまわったものをまとめた資料があった。

(豊橋市環境保全課) 根絶の判断について、私も外来生物の関係をやっていて頭を抱えているが、生息調査をして一度いないとなっても、やはりいるかもしれないので調査をするがどこまで調査を継続すべきか。

(講師) 根絶したかどうかは原理的に証明できない。0に非常に近いかどうか

評価しようということで奄美の場合は慎重に調査した。一旦根絶が確認されれば島の場合は船で渡ってくるとかがなければ根絶と考えていいが、いつでも入ってくるような可能性がある地域はずっと監視を続ける必要がある。

(狩猟連合) 犬を使う場合について、箱罾くくりわなは捕獲する動物が来るのを待つ形だと思う。ただ、犬を使う場合は逆に攻めていく形だと思う。犬で追い込んで捕獲するとの話があったが、穴の中とか木にいるマングースはどうやって捕まえているか。

(講 師) 土の穴でも木でも、犬に追い込んでもらい、まずファイバースコープを使ってマングースがそこにいるか確認して、煙幕を使って気絶させる。犬は噛みついたりする可能性があるので、口輪をはめて追い込みだけやってもらう。

(4) 議事 (議長：野生イノシシ対策室 住田室長)

① 野生イノシシ捕獲に係る取組状況について

- ・資料1-1、1-2に基づき事務局から説明。

【概要】

- ・2024年度の野生イノシシの捕獲頭数は豊橋市228頭、田原市258頭となっており、2023年度の捕獲頭数を大きく下回る状況となっている。
- ・2025年度は、5月末時点では、前年度と比較して増加している。
- ・豊橋市及び田原市において、野生イノシシの生息状況調査により総個体数を推定しており、2023年度は800頭程度であったが、2024年度は900頭程度に回復していた。
- ・大山山塊の生息密度の分布が2023年度と比較して高くなっている。
- ・野生イノシシによる農業被害額について、豊橋市は2021年度以降、増加傾向を示している。田原市は2021年度以降低額で推移していたが2024年度に急増化している。これは、調査手法を農家全戸へのアンケート調査に変えたため前年度と比較して大きく異なると考えられる。
- ・愛知県が2019～2020年度にかけて豊橋市及び田原市各所に設置した、野生イノシシを対象とした移動防止柵及び山塊分断柵について、設置から6年程度経ち損壊も多く修繕により対応している。今後、償却年数を踏まえつつ、維持管理のあり方について検討を進めていく。
- ・県内全域での野生イノシシの捕獲頭数は2023年度と比較して増加している。

② 今後の取組について

- ・資料2に基づき事務局から説明。

【概要】

- ・鳥獣被害防止総合対策事業費補助金の県の上乗せ金額を引き続き、成獣1万3,000円、幼獣6,000円としている。
- ・2025年度の渥美半島における指定管理鳥獣捕獲等事業では、くくりわな（山中を含む）を中心に実施している。
- ・これから狩猟免許取得を検討している方、狩猟免許を取得したばかりの方を対象としたセミナー等の実施を予定している。

【質疑・意見等】

- (有識者) 豊橋市では農業被害の算出の方法は変わってないか。
- (事務局) 豊橋市については同様の方法でほぼ同レベルで推移している。
- (豊橋市農業支援課) 豊橋の場合は農業団体に確認している。
- (有識者) 柵の修繕について、メンテナンス、設置の方法、体制などを調べた論文が出ているが、そのあたりは、引き継がれているか。
- (事務局) 論文の引継ぎについてはないと思うが、柵のメンテナンス方法は前任のものから聞いて行っているので、やり方は引き継がれている。
- (有識者) 引き継がれていればいいが、例えば作った業者の方が鳥獣防止の柵に慣れてなくて人用の柵の感覚で作るといろいろと不備がある。イノシシは下をくぐることが多いなどの特徴があるのでその辺りは留意いただきたい。
- (狩猟連合) 田原市の場合、移動防止柵の端が切れたところがあって1度端に出てまわってくる。くぐっているというのはいらない。
- (有識者) くぐるのは柵の修繕などの話。人の生活を考えると全て連続できないのでどうしても継ぎ目が残る。移動防止柵は効果もあるが限度もある点は考慮の必要がある。

(5) 意見交換（議事・講演を振り返って）

(議長：野生イノシシ対策室 住田室長)

- (事務局) 講師の講演、議事の1と2、これらの内容を踏まえ、渥美半島におけるイノシシの捕獲体制のあり方、移動防止柵の維持管理などご意見をいただきたい。

【意見等】

- (田原市農政課) イノシシによる農業被害額及び捕獲頭数の推移の捕獲頭数について、田原市と豊橋市が同じような軌道描いてるように見えるが、イノシシが行き来していると理解するべきか。それとも同じように捕獲をしていて、隣同士の地域のイノシシが同じように増減しているのか。
- (事務局) 具体的な回答は持っていないが、山がつながっている地形ではないのでたまたま同じような傾向を示しているのではないか。
- (狩猟連合) 捕獲頭数は気象条件的なものもあるかもしれないが、稼働しているわなの数による。雄は行動範囲が広いが、雌はそこが安住の地だと思ってあまり

動かない。

(狩猟連合) 田原市は農業被害額が大きいけどほとんどが田んぼか。

(田原市農政課) 被害額は被害があった面積を報告してもらって、面積に係数を掛けて出している。水稻が多い。

(有識者) 岐阜県的美濃加茂市で発信器をつけたときに、雌の場合は行動範囲が意外と狭かったので長距離移動をあまりしてない可能性があり、雌の場合は2つの市を跨ぐことはあまりないような気がしている。捕獲努力量だとか何かの問題があるかもしれない。

(豊橋市農業支援課) 解決という話だが、若干上下しているものの同じような頭数で推移しているから、同じように続いてしまうのではという気がしている。次の一手、別の方法など考えていることがあるか。

(事務局) 協議会設置から6年が経過して7年目に入っている。協議会の設置目的が、農業被害の防止、野生イノシシの根絶であり、それぞれの立場で努力してきたが根絶という状況には至っていない。例えば根絶に向けて、対応策のフェーズを上げていくと考えたときにどのようなことが考えられるか。

(狩猟連合) 渥美半島の場合は移動防止柵で区切られたところで、犬を使って山の中で追いまわすことができる。移動防止柵の横に出たところで撃てないかなど。どこかで犬を使った事例があるか。

(有識者) グラムで成功したイノシシ根絶の場合、その最終的な決め手となったのが犬の導入とされる。マングースのようにある程度数を減らしたが最後段階で犬を使っている。犬については、地域にもよるが、日本では巻狩り的な使い方が一般的だが、グラムの場合は全く異なり、2通りの使い方をしてきた。1つは鳥猟のようなポイントする方法、あと吠えて止めるという方法である。この地域ではわからないが、巻狩り的な犬の使い方だとあまり効果がないかもしれない。

(狩猟連合) 豚熱が出る前は豚舎周辺でそこまでイノシシが確認される状態ではなかった。豚熱が出てからは移動防止柵を設置するようになった。前は犬を放すことができなかったが、今は柵がついているので、移動防止柵に沿って放せば、打ち手も山の中で待機しなくていいので効果があるのではないか。

(有識者) そのやり方が適切かどうかはわからないが、1つの考え方ではないかと思う。ただ、昨今ニュースになっているが、猟犬による事故、リスクは非常に高い。余程コントロールできるような、捕獲だけではなくて、調教されていて担保されているような犬を使わないと、責任問題が出てくる。捕獲従事者だけではなくて発注者側に、責任が来るかもしれないし、猟友会組織側にも来るかもしれないのでリスクと効果を照らし合わせながら考える必要がある。

(狩猟連合) 長距離で足がのびる犬を使えば、効果が出るのではないか。そのような犬種を混ぜて狩猟をする方法がいいのではないかと考えている。

(有識者) 犬については、慶良間諸島で活動しているグループが県の事業で、グラム

で実施したところへのヒアリングもしている。今出た犬種の問題だとかある程度調べ、沖縄県さんに聞いてみてもよいと思う。

- (事務局) 犬については注意点もあるということで、根絶を目指す方法として他に何か手法はあるか。
- (有識者) 手法というよりも体制の問題。講演でも話された、専属で、職業として朝から晩まで捕獲のことを考えて作戦を練られるといった、体制が大事。
- (講師) 最初は報奨金制度で、捕獲従事者が自由な時間を使ってやるが、報酬が見合わないとやってくれない。専従で集中して仕事としてやってもらう必要があるが、一方で委託費が掛かる。
- (事務局) 体制の問題は、どこまでコストを掛けながらやっていくかが重要と理解した。奄美大島という区域の中ではマンガースの根絶が達成された。渥美半島のイノシシの根絶を目指しているが、半島で、地続きの地形で、面積的には奄美大島の倍以上の面積。このような地理的条件の中で、イノシシの根絶を目指すことの可能性はどのような感じか。頑張ればできるのか。その辺りの感触を伺いたい。
- (講師) できる、できないの断言はできないが、イノシシはマンガースよりも大きい。頭数も推定値 900 頭程度で捕獲が数百頭のイメージ。どの程度労力をかけてこの数字になってるかわからないので、捕獲努力量のデータがあるといい。
- (有識者) 先ほどの専従の例の 1 つで、新聞読んだ記事だが、和歌山県で開発された鹿の捕獲わなを豊田市で使用したものがある。今までのわなでは下をくぐり抜けてしまうため、その下をくぐるという習性を使ってシカを捕獲するわな。和歌山ではうまくいったが、豊田ではうまくいかず、コメントによると和歌山だと柑橘類があり、下をくぐる習性があるから捕れたと記事で出ていた。一方で、屋久島でも同じようにやっており、屋久島は国立公園でくぐる経験はないが結構捕れている。屋久島ではほとんど専従の人が毎日ヘッド網を垂らす角度などを細かく調整して、全部カメラで撮ってと、莫大な努力量をかけている。合間で少し改良してでは限界があるのかなと屋久島での経験から思う。
- (JA 豊橋) 豊橋東部の柵から海岸にかけて、海岸住宅地の家のあたりにもイノシシの足跡がある。細谷、寺沢のあたりでも 100 キロ以上のイノシシを猟友会の方に捕まえていただいている。イノシシはどのような移動をしているのか。
- (狩猟連合) 田原の方でも海岸に足跡がある。細谷の方も静岡の方から来ているのではないか。どのように移動しているかまでは把握できないが、表浜が多い。
- (事務局) 最後に 1 点、養豚関係者として、豚熱防疫の観点から、野生イノシシの脅威について現状どうお考えか。やはり怖いものなのか、ワクチン打ってるので大丈夫と思ってるのか感覚を教えてください。
- (JA 愛知みなみ) 出ていないとは言っても脅威には感じている。
- (養豚部会長) 自身の養豚場も豚熱にかかり殺処分をしている。脅威でしかない。陰性だ

と言われても豚熱の経験があるので、引き続き対処してもらいたい。

(JA 豊橋) 養豚団地から近いところでイノシシが増えていけばいつ入ってもおかしくないので常に危機を感じている。細谷、小沢の辺で結構出て猟友会の方に捕まえていただいているが、減らないのでどこかから来ているのでは。引き続きやってほしい。

(事務局) 引き続き捕獲圧を高めてやってほしい旨認識した。県としても本日の意見を参考にして今後の施策に反映していきたい。

(6) その他

【連絡事項】

- ・渥美半島野生イノシシ捕獲根絶協議会の構成員の変更に伴い、同協議会の設置要綱の改正について説明。構成員より承認が得られたため、本日をもって設置要綱を改正する。